寄稿

ESPからの提言

野口ジュディー

1．はじめに

ESP(English for Specific Purpose)とは「特定の目的のための英語」であり、ある辞典では「明確な目的と特殊なニーズによって区別される集団または個人の学習者のための言語プログラム」と定義されています[1]。しかしこの定義だけでは、「何を」「どのように」教えればいいのかは明らかではありません。本稿では、ESPの実践に基づいて、特定の目的を持つ言語教育のための「言語モデルの構築」と「指導法」について提案をします。

2．言語モデルの構築への観点

特定の目的のための言語教育を行なうに当たっての第一の課題は、言語モデルを定めることです。ESPの目標モデルを構築するのは英語母語話者ではなく、各専門領域のディスコース・コミュニティです。ディスコース・コミュニティとはある専門的な学問や職業に携わる人々の集団であり、そのメンバーは社会に対して貢献、改善、改変を行なうという共通の目的を持ち固有のニーズを持っています。この共通目的を達成するためにコミュニティ内でコミュニケーションが行なわれますが、それに用いられる手段が繰り返し使用されることにより「形」が定まり、「ジャンル」となります[2]。

現代のESP研究や教材開発が始まったのは1960年代で、それ以前には旅行者用の表現集や海運従事者用の辞書があった程度でした。第二次世界大戦後、植民地時代が終わり国際的経済活動と科学技術が発展するにつれて国際語の必要性が高まり、そのための様々な研究や教材開発が行われるようになりました。1950年代から60年代には文法や語彙(専門用語など)の分野、即ち、ビジネス英語や科学技術文書の特徴に関するものが主でしたが、1970年代になるとコミュニケーションが重視されるようになり、科学技術の分野やアカデミック・ライティングに必要な定義・分類・説明の文が練習できる教材が作られました。また、ESP教育は南米・マレーシアなど世界各地へと広がりました。1980代になると、学習スキルの向上に関心が集まりました。ビジネス用の教材開発が進んで文法中心から機能重視へと方針が変化し、種々の教授方法が使用されました。1970年代にはビデオ教材、1980年代にはケース・スタディーが取り入れられました。1990年代には、English for Occupational Purposes (EOP、職業目的の英語)、English for Academic Purposes (EAP、学術目的の英語)など、目的がさらに特化されるようになり、ジャンル分析によって様々な環境で使用される専門英語についての研究、例えば、科学技術のための研究発表や論文の特徴、法律英語、医療系環境での言語活動などについての研究が盛んになりました[3]。

最新の研究は言語活動の本質を一層深く掘り下げて探求しようとしているようです。ジャンル分析は北米とオーストラリアでそれぞれ独自の発展を遂げましたが、Bhatia[4]はESPの理想と現実との関係を整理して、Swales[1]が依拠したBakhtin(ロシアの哲学者)の考え方、即ち、ディスコースの二面性(自己と非自己)を認識すべきであるということを再び強調しています。つまり、ディスコースから生まれるジャンルはそのディスコースを発信する者と受信する者とその人々の活動している環境によって変化するということを認識するということであり、最近注目を集めているキーワードはinterdiscursivity(「複線間相互作用」とでもいいましょうか)です。2005年8月末から9月にイタリアで行われたThe 15th European Symposium on Languages for Special Purposes: New Trends in Specialized Discourse[5]において、Candlinも同様の主張をしました。即ち、text, social action, participants' social/institutional perspectives(テクスト、社会的行為、参加者の社会的観点、参加者の専門集団的観点)という4つを考慮しなければならないというのです。第一の、テクスト(書かれた文書だけでなく、口頭のものも含む)について重要なことは、言うまでもなくそのテクストの特徴です。しかしそこに留まらず、そのテクストが社会で行なうア

クションを理解しなければなりません。さらに、このテクストに対して発信者と受信者それぞれが持つ観点と、このようなディスコースが発生する環境をも視野に入れることが必要です。つまり、言語は社会活動であり、その目的と特徴を正確に捉えるためにはテクストだけを観察するのでは不十分なのです。一つのジャンルのテクストには三つの要素が含まれます。即ち、action(社会への働きかけ)、substance(伝えたい内容)、form(メッセージを発信するための形)です。このうち、専門領域の substance を提供するのは ESP の学習者自身です。ESP 教育は、action を認識した上で form を学習者に学んでもらうことだと言えましょう。

3．モデル構築における ESP の手法の利用

ESP の手法は、言語モデル構築にどのように利用できるでしょうか？ まず、自然言語を、パターンを持つものとして考えましょう。音の繰り返すパターンが言葉となり(単語)、言葉の繰り返すパターンが句や節となり、句や節のパターンが文章となり(文法)、文章パターンがテクストとなり、テクストのパターンがジャンルとなります。このジャンルのパターンは上記のディスコース・コミュニティが繰り返し利用することによって定まった形となっていきます。もちろん、一般的な英語のルールが基盤になっているのですが、その専門領域特有の特徴が数多く存在します。例えば、単語やフレーズ(*however, such as* など)の用法、動詞の時制(現在形や現在完了形)の示唆する意味などは、領域によって微妙な違いが見られます。

領域特有の特徴を知るには 3 つの方法があります。(1)スタイルマニュアル・ガイド・参考書を参照すること、(2)ジャンル分析をすること、(3)コーパス言語学のツールを利用することです。辞書や文法書の利用価値はよく知られており広く使われていますが、スタイルマニュアルやガイドは案外見落とされがちです。主にアカデミック文書を作成するためのよく知られているガイドとしては、The Chicago Manual of Style, APA Publication Manual, The Modern Language Association Guide and Manual to Scholarly Publication などを挙げることができます。学術誌には通常それぞれ独自のマニュアルがあって、それに従って文書を作成することが求められます。しかし、ガイドやマニュアルに明記されているルールを知るだけでは文書を作成するには不十分であり、ジャンル分析によってその領域の文書の特徴を明らかにする必要があります。更に、そのジャンルで使用される単語や表現を知ることが必要ですが、それにはコーパス言語学のツールを利用することができます。ESP コーパスは目標ジャンルのデータベースのことで、これを検索するにはコンコーダンスソフトを使用します。これによってそのジャンルで頻繁に使用される単語や表現、文法のパターンを明らかにすることができます。

4．ESP 教育の手法

次に、ESP 教育の具体的方法に触れたいと思います。前節で述べたようにジャンル・テクストは action, substance, form の三つの要素を含んでいますが、substance は専門領域によって異なります。専門用語や表現が違うだけでなく、記述方法にも分野特有の形が使われることがあります。とは言え、特定の action を起こすためのテクストであれば似た form をとることになります。例えば、学術論文は分野を問わず類似した form をとります。従ってこの form を特定できれば、学習者は自分の substance を発信するためにその form を利用することができるわけです。ESP 教育は substance ではなく form を中心とする教育方法なのです。

Form を認識し利用するための手がかりとなるのが、OCHA と PAIL です。OCHA は以下の要素の頭文字を取った省略語で、踏むべき手順を示しています。

Observe	観察する
Classify	観察されたものを分類する
Hypothesize	分類されたものから使い方に関する仮説を引き出す
Apply	仮説を利用して創造する

観察する対象をまとめたのが PAIL (同じく次の頭文字からの省略語)です。

Purpose	このテクストの目的
Audience	想定する聞き手、読み手
Information	伝えたい情報
Language features	ジャンルに合う言語特徴

観察すべき言語特徴には、Rhetorical なもの(情報の

内容や提示順序の特徴)、Grammatical なもの(文法的特徴)、Lexical なもの(用語の扱いに関する特徴)、Technical なもの(パンクチュエーション、フォーマットなど)、音韻的なもの(発音、強勢、プロソディー)があります。

5．教室での実践　その１

実践例として、工学系大学院生を対象とする論文の書き方の授業を取り上げたいと思います。まず、学習者の専門分野の専門誌における投稿規程を読んで、原稿作成にあって注意しなければならない点を観察することから始めます。各学習者が目的としている専門誌の特徴(たとえば、要旨の字数、論文の構成、フォントの指定など)をエクセルファイルに記入してクラス全員のものを一つのファイルにし、比較検討します。この作業では、複雑な投稿規程の見方を学ぶだけでなく、他の専門誌の規定との比較によって各自の専門領域の特徴を把握することができます。次に、論文の文書の特徴をつかむために、ジャンル分析で用いられる move analysis(ムーブ分析)を行います。ムーブ分析というのは、文書の部分が担う action を特定することです。例えば、要旨に見られる典型的なムーブパターンの一つとして以下のようなものが抽出されます[6]。

abs1: 研究の背景(通常１文。省略されることもある)

abs2: その研究で何をしようとしたか

abs3: 研究に用いた方法、仮説、モデル

abs4: 主要な結果

abs5: 結論(最も主張したい点)

ムーブについても、専門誌の特徴を分析する場合と同様に、学習者各自が分析を行なって下の表１のようにまとめます。

クラス全員のものを一つのファイルにまとめるとジャンルや専門領域の特徴が明らかになり、読み手に内容の展開を伝えるのにどのような表現や動詞の形を利用すればよいかがわかります。また、コーパスのデータベースを利用すれば、どのような単語やフレーズが頻繁に使用されるかを調べることができます。例えば、we の後にくる動詞の種類、名詞の前に定冠詞または不定冠詞が必要かどうか、動詞と共起する前置詞などのことを知ることができます。ある工学系のコーパスでは、we と頻繁に共起する動詞は現在形の refer, believe, consider, conclude, propose, show, compare, denote, evaluate など認知系の動詞でした。

こうした分析と観察を行なった後、学んだことを応用して学習者は自分の論文の要旨を書きます。この時点では自分の研究がまだ終わっていないことが多いのですが、ジャンル・テクストの form を練習するつもりで書き進めます。研究が完成した時点で、substance に合わせて書き直せばよいわけです。論文のほかの部分についても同じような手順で特徴を把握して、自分の文書を作成します。

6．教室での実践　その２

次に紹介するのは、薬学専攻の学部生対象の実践例です。最近インターネットから情報を得る機会が多くなっていますが、この授業では専門領域の英語のウェブサイトにどのようにアクセスしどのように利用すればいいのかを学びます。まず、教科書を使って薬剤情報を検索する専門サイトと一般検索サイトと専門機関の文書の特徴を OCHA の手法で学んだ後、３～５人のグループで医療関係の英語のウェブサイトを紹介す

表１　ムーブ分析の例

Sentences (文)	Verb (動詞時制)	Hint expressions (特徴的用語)	Section (段)
XXX ***contributes significantly to the global*** carbon balance and ***is therefore being monitored around the world***, most notably using YYY technology.	present	contributes significantly to the global carbon balance … is therefore being monitored around the world	abs1
In order to extrapolate from these measurements, ***we need to understand*** why XXX differs among forests.	present	we need to understand	abs1&2
Here, ***we use a detailed model*** of XXX applied to three EEE forests with differing NEP to pinpoint reasons for the differences among these sites.	present	we use a detailed model	abs3
These data gave evidence of major differences among sites in …	past	These data gave	abs4
The work provides detailed quantitative evidence of the major factors causing differences in …	present	The work provides	abs5

るというプロジェクトに取り組みます。ウェブサイトの検索手順、選んだ理由、PAIL、内容の要約、信頼性、読みやすさなどをまとめ、パワーポイントを使って発表へと結び付けます。学んだことを応用して発表へと結びつけ、クラスの人々と情報を共有した結果、英語の力はまだ不完全ではあるものの、学習者は専門サイトから情報を得ることに大きな喜びを覚えます。これがさらに学ぶ意欲を高めることにつながります。

7．終わりに

ESP は専門内容(substance)を教えるのではなく、その専門内容を社会に働きかけていく(action)にはどのような形(form)が必要であるか、即ち、言語モデルの特徴を認識し、その知識を使うことを練習するものです。具体的には、スタイルガイド、ジャンル分析(ムーブ分析)、コーパスデータからテクストの特徴を特定し、OCHA の手法で PAIL を認識して、それらの知識を用いて専門文書を効率よく作成することに挑戦するといった実践が行なわれています。

参考文献

1)ジョンソン, K. & ジョンソン, H. (編集), Johnson, K. & Johnson, H. (原著), 岡秀夫, 鈴木広子, 中鉢恵一, 金沢洋子, 窪田三喜夫, 堂寺泉, 山内豊 (翻訳): 外国語教育学大辞典, 大修館書店, 東京 (1999)

2)Swales, J. M.: Genre Analysis: English in Academic and Research Settings, Cambridge University Press, Cambridge, UK., pp.24-27 (1990)

3)Bloor, M.: The History of ESP: Theory and Practice, Annual Report of JACET-SIG on ESP (Headquarters) , H. Terauchi, S. Saito, and S. Sasajima eds., Tokyo, JACET-SIG on ESP (Headquarters), Vol. 4, pp. 17-31 (2002)

4)Bhatia, V. K.: Worlds of Written Discourse: A Genre-Based View, Continuum International Publishing Group Ltd., Cornwall, UK. (2004)

5)Candlin, C. N.: Accounting for Interdiscursivity: Challenges to Professional Expertise, Plenary lecture at The 15th European Symposium on Languages for Special Purposes: New Trends in Specialized Discourse, University of Bergamo, Italy, 29th August-2nd September (2005)

6)野口ジュディ・松浦克美: Judy 先生のはじめての英語科学論文の書き方, 講談社, 東京(2000)

7)Bhatia, V. K.: Analyzing Genre: Language Use in Professional Settings, Longman, London and New York (1993)

8)Holquist, M.(ed.): The Dialogic Imagination: Four Essays by M. M. Bakhtin (Translation of Voprosy literatury i estetiki) , University of Texas Press, Austin, TX. (1981)

Some Suggestions from ESP

NOGUCHI, Judy

Mukogawa Women's University, School of Pharmaceutical Sciences,

11-68 Koshien Kyuban-cho, Nishinomiya, Hyogo 663-8179

jnoguchi@mwu.mukogawa-u.ac.jp

English for Specific Purposes (ESP), with a history of research and development dating back to the 1960s, deals with the language used by a discourse community for communication for professional or occupational purposes. The resulting texts, both written and oral, can be classified into types, or genres, which possess the three features of action, substance and form. Two examples of genres are research journal articles and conference presentations; both may have almost the same substance, or content, but have different actions and forms, the former using the features of formal written language and the latter those of oral language. Teaching the use of a language for specific purposes involves equipping the learner with an awareness of genre texts and the tools with which to identify their rhetorical, grammatical, lexical, technical and phonological patterns. Suggested as being useful is the OCHA approach in which the learners are asked to Observe genre texts, Classify what they have found, Hypothesize about the usage of the features and Apply them for their own work. What they observe is the PAIL of the text: purpose, audience, information and language features. Useful tools include genre analysis and concordance software from corpus linguistics.

Keywords: ESP, discourse community, genre, OCHA, PAIL, genre analysis, corpus linguistics